

審査の結果の要旨

氏名 百橋明穂

論者は日本の仏教美術におけるもっとも根本的な特質は説話性であると規定する。本論文はこの観点から、わが国仏教説話画がどのように発展展開したかを明らかにしようとしたものである。とくに時間軸と空間軸の連続的移動が、いかに二次元の平面に表現されているかという点から考察されている。研究方法上の特色としては、観念的な思弁を排し、あくまで実際の作品に即して具体的に証明しようとする実証性を挙げることができる。また、中国や朝鮮の仏教説話画をも考究の対象とし、それらとの比較においてわが国仏教説話画の特色を明らかにしようとする広やかな視野も特筆されてよい。さらにそれらの研究成果に立ち、美術史学の観点から改めて図像や様式の問題を考察しようとする真摯な研究態度も高く評価される。

「日本の仏教説話画」の章では「善財童子歴参図」「東大寺善財童子絵巻」「本興寺法華経変相図」「廬山寺普賢十羅刹女図」「聖徳太子絵伝」が取り上げられた。とくに「善財童子歴参図」の考察はもっとも力籠る部分であり、この章の中核をなしている。論者は東大寺をはじめ諸家に分蔵される二十面のうち十九面を精査し、伝来、典拠、図様、讃、技法などの観点から考究を進め、十二世紀後半の東大寺における復古的な気運のなかで制作された作品であることを明らかにした。その画家集団を図像的伝統に忠実なグループと、十二世紀後半の新しい絵画様式を盛り込むグループに分けた見解も、充分説得力を有するものである。

「中国・朝鮮の仏教説話美術」の章では、おもに敦煌壁画が論究の対象となる。論者は初期本生図の重要性に着目し、主題および画面展開法の二点からこれを整理し、分析を進めた。その結果、画面形式としてはフリーズ式のものが大部分を占め、それらはフリーズの進行方向に沿って時間的経過や説話の筋をたどる形式と、フリーズ内での構図的配慮がなされる形式に分類できること、しかし隋代後半に入るとフリーズ式の限界をあえて破ろうとする傾向が生まれることが明らかにされた。内容的にはあくまで人間中心の本生図であるという特色の指摘も注目されてよい。隋代窟については別途探究が進められ、北朝時代の仏伝図・本生図から、隋末に説話性を排除した三世仏・賢劫三千仏の世界への大転換が起こったという興味深い新知見が提示された。

「古代壁画研究」の章では、新しく出土した上淀麿寺の壁画断片とキトラ古墳壁画の全様が詳細に報告され、その制作年代などが究明された。これらは論者がとくに請われて調査団に加わり、その調査報告書に執筆したものであり、この分野における論者に対する高い社会的評価と信頼を物語っている。これらと並んで、わが国古代寺院における堂内壁画荘嚴の系譜や古代絵画における自然および風俗の表現、さらに五期に分けられた隋唐陵墓壁画の展開も講究された。それは論者の日本および中国古代絵画全般にわたる深い洞察と豊かな展望を示すものであるが、その際にもつねに実証性が根底を支えている事実を見逃すべきではない。「仏教美術史研究における図像と様式」の章は、両者の関係を討究したものだが、ここでも遺品の分析を基礎とし、きわめて具体的に論述を進めて反論の余地を残さない。図像的研究と様式的研究との有効性については、対象に

よって慎重になるべきであるという結論は至言であろう。

以上、本論文は強い実証性に裏打ちされるとともに、多くの独創的見解と新知見に満ち、仏教絵画なかならずく仏教説話画の研究水準を飛躍的に高めた業績だと評価することができる。労力を傾けて制作された多くの詳細なリストや付図とともに、後学を裨益するところもきわめて大である。全体の構成に統一感を欠く恨みがないでもないが、それはあくまで作品から遊離しまいとする論者の実証的研究態度と表裏一体をなすものであり、あえて瑕瑾とするには及ばない。したがって、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと審定した。